

---

# R G S ~レトロゲームシスターズ~

沙 亜竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

RGS ~レトロゲームシスターーズ~

### 【Zコード】

Z7085Y

### 【作者名】

沙 亜竜

### 【あらすじ】

父親を亡くした3姉妹。その父親が遺してくれた形見は、膨大な数のレトロゲームだつた。

ゲームが大好きだった父親を思い返しながら、3姉妹はレトロゲームで遊び始めた。

小説……ではないです。レトロゲームをネタにした話です。こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、わかりませんが……。

## 第0話 いのちの3姉妹はレトロゲームを始めた

### 【序章 カイコの独白】

お父さんが、死んだ。

私たち3姉妹にとつて、受け入れがたい現実。

大好きだったお父さん。

もう笑いかけてくれることはない。  
もつ怒つてくれることもない。

まだ幼かつたカイコは泣きじゃくっていた。

いや、小学生だったチョコも私も、声を枯らして泣き続けたつかけ。

でもお母さんだけは、私たちのそばで毅然とした態度を崩さなかつた。

だけど私たちが寝入つたあと、声を押し殺して泣いていたのを、私は知っている。

あれから数年。

お母さんは私たちを養うため、必死に働いている。

お父さんはゲームが大好きだった。

その影響で、私たち3姉妹もゲームが大好きになつた。

家計は苦しかったけど、お母さんは私たちがゲームするのを止めた  
りはしなかった。

お父さんが好きだったことを、お母さんも知っているから

あの日、お父さんの部屋にひっそり入った私たちが、見つけてしま  
つた。

お父さんの遺した、本の山の上でも、レトロゲームの数々を

### 【愛する娘たちの図書館】

さて。

俺の愛する娘たちは、今どうしているかな。

もう俺が死んでから何年も経ってしまった。

俺のことなんて、すっかり忘れてしまっているかもしね。

それならそれで構わない。すっぱり諦めて帰ることができるからな。

……いや、もちろん悲しいとは思うが。

だが、俺のことなんて忘れてしまったほうがいいのかかもしれない。  
娘たちには幸せになつてほしいのだから。

懐かしの我が家が見えてきた。

少々怖い部分もあるが……。

のぞいてみるとしよう。

どれどれ……。

おっ。3人とも集まっているみたいだな。

おや？ あそこは俺の部屋のはずだが……。

……。

そうか。俺の宝物だつた古いゲームを見つけたのか。  
もちろん一番の宝は娘である彼女たちだつたわけだが。

薄汚れた古いゲーム。

俺が死んだあとも、隠したままになっていたんだな。

隠していたというよりも、古いから仕舞つておいただけだったが。

とはいえ、娘たちにとつては時代遅れの「ゴミ」でしかないだろう。  
こんな汚いのが残つてた。捨ててしまおう。

そんな会話の果てに、ゴミ袋に投げ込まれてしまつ運命が待つているに違いない。

しかし、俺が苦笑まじりで思い描いたような展開にはならなかつた。

チョコ「カイコ姉、これって……」

カイコ「ゲームねえ~。しかも古いわ。さすがお父さん~」

ミコ「姉様方、おふたりとも、田がキラキラ輝いてますね」

チョコ「やうごう//ミコア~! ほら、ピダレ拭けよ~!」

カイコ「ふふつ。私たち、ゲームが大好きだものねえ~。お父さんの影響で」

ミコ「父様は神様です!」

チョコ「出た! ミコのオヤジ信仰!」

ミコ「なんですか、チョコ姉様! 悪いとでも言つんですか!~?」

チョコ「べつに悪かねえけどよオ……」

カイコ「ふふつ。ミコはお父さんにべつたりだつたものねえ~。

まだ幼かったけど、ミコが『おとうちやま~』って呼ぶ声、  
今でもはっきりと耳に残つてるわ~。

よちよち歩きで、まだ可愛かったのよねえ~

ミコ「ちょ……、カイコ姉様! 赤ん坊の頃のことなんて、忘れて  
ください~!」

カイコ「いい思い出よお～？ 忘れたらもったいないわ～」

チヨコ「やうやう。//」をからかう、いいネタになるしなー。」

カイコ「ふふつ、やうね」

//「姉様方、こちわるです……」

チヨコ「まあ、それはともかく……。このゲームの山、すげえな！」

//「//たちが今これを見つけたというのは、天国の父様のお導きかもしません」

カイコ「やうねえ……。それじゃあ、これから1本1本、みんなで遊んでいきましょー！」

チヨコ「異議なし！」

//「はい、カイコ姉様！」

.....。

カイコ、チヨコ、//。。

俺の知っている頃からすると、随分と大きくなつた娘たち。

3人とも、俺のことを忘れてなどいなかつた。

しかも、俺の遺したゲームの山を 時代遅れの化石染みたゲームの数々を、喜んで遊んでくれるというのか。

ありがとう……3人とも……。

俺には、すでに流せなくなっているはずの涙が、心の奥底から込み上げてくるように感じられてならなかつた。

せつかくだし、娘たちの様子をしばらくのあいだ観察してみることにしよう。

今の俺には、時間はそれこそ無限にあるのだから。

### 【人物紹介とルール解説】

カイコ「というわけで、私が長女のカイコ、高校1年生よ~」

ミコ「カ……カイコ姉様、誰に喋つてるんですか!~」

カイコ「ふふっ、細かいことを気にしちゃダメよ~」

チヨコ「突然家の中で自己紹介なんて始めて、頭おかしくなつたかと思つたぜ……」(ぼそつ)

カイコ「あら、チヨコ。なにか言つた~?」

チヨコ「いやつ、なんでもない!」

カイコ「あら、 そう? ふふふ……」

ミリ「カイコ姉様、 笑顔なのに怖いです……」

カイコ「ふふつ。私はおしとやかでか弱い女の子よ。」

それはともかく。

私はロールプレイングゲームとアドベンチャーゲームが大好きなの~」

チョコ「アドベンチャーフィング、ノベルゲームだろ! それもB級の!」

カイコ「ちょ……!? そ……そういうのもやるつてだけよ~!」

美形男子が出てくるゲームなら全般的に好きだもの~!」

チョコ「どうやらしても、ダメダメじゃないか? カイコ姉、リアルではサッパリだろ?」

カイコ「うぐつ……!」

で……でも~、可愛い動物とがが出てくるゲームも好きだ  
もの~!」

チョコ「はいはい。今さらつて感じだけどな。事実は事実なんだじ。

……ま、紹介を続けるぞ?

オレは次女のチョコ、中学2年。アクションゲームが大好きだ!

格闘ゲームやアクションパズル、レースにスポーツなんか  
も得意分野だな!」

カイコ「つまり、暴れるのが好きなのよねえ~」

チヨコ「誤解を招く言い方すんなよー。」

カイコ「ふふつ、それにね、この子、可愛い女の子が大好物なのよー！」

チヨコ「うあつ、カイコ姉、なにをー？」

カイコ「事実は事実でしょー？」（ニヤニヤ）

チヨコ「くつ……、仕返しつてわけか……ー。この悪女めー！」

カイコ「ふふつ、チヨコ姉ビビらないわよおー」

ミコ「姉様方、ケンカはやめてください。お互いの暴露合戦なんて、見苦しいですよ~」

カイコ「あら、そうよね。さすがミコはいい子ね~。

つて」と、この子がミコのミコ、小学校6年生よ

チヨコ「つていうか、暴露合戦ってなんだよ、ミコー。」

ミコ「ひやあー！チヨコ姉様、ほっぺたを引っ張らないでくださいー！」

カイコ「まあまあ、落ち着いて、チヨコ。」

ミコは、シミュレーションゲームや思考型のパズルゲームなんかを

好んでプレイする頭脳派なのよね~

〃「あとで、シューティングゲームなんか好きですね。  
昔ながらの弾幕系とか、そういうものの専門ですけど」

カイコ「やうね。FPUなんかだと、チップの分野になるかしらね  
え~」

チヨコ「こんな感じで、好きなジャンルが結構分かれているのが  
面白じよなー」

カイコ「ふふつ。

だからいや、それそれが好きなジャンルを担当するって形  
にできるのよね」

〃「ゲームは初見プレイのまつが楽しいでしょうから、  
担当者はネットであらかじめ調べたりしてはいけないんですね」

チヨコ「やうだなー。そのまつが面白くなつそうだしー。」

カイコ「ええ。担当者は順番になるから、

次はどのタイトルにするかを他の2人で決めておく感じね

チヨコ「担当者以外は、

ネットとかいろいろ調べておいてのまつでルールにする  
んだよなー！」

カイコ「ふふつ。そのまつが、いろいろとシッピも入れられるし  
ね~」

〃「……なんだかそのルールだと、  
〃だけ思いつきり姉様方にからかわれそうな予感がするん  
ですが……」

チヨコ「氣のせい氣のせい！」

カイコ「やつよお～？

〃も普段のうつぶんを晴らしかねえばいいのよ、チヨコ  
が担当のときにな」

チヨコ「カイコ姉だつて当然標的になるだろー？」

カイコ「あら、〃はそんな悪い子じやないわよねえ～？ ねえ～  
～～～つ！？」（ずずいつ）

〃「うう……。はい、カイコ姉様……」（ガタガタ）

チヨコ「笑顔でその凄み……。カイコ姉……やつぱ悪女だ……」

カイコ「なにか言つた～？」（ヒヒヒヒヒヒ）

チヨコ「い……いや、べつに……」

カイコ「ふふつ。とりえず、最初の担当者はチヨコに決定ね！  
異論はないわよねえ～？」（ヒヒヒヒヒヒ）

チヨコ「う……、はい……」（がつぐつ）

〃「ところわけで、最初の担当者はチヨコ姉様になりました」

カイコ「それでは、次回第1話、お楽しみに〜」

## 第〇話　「うつむき姉妹はレトロゲームを始めた（後書き）

こんな、小説とは言えない作品をお読みいただき、ありがとうございます。

レトロゲームをネタにした話を書いていく予定です。

題材にあるゲームは、ファミコン、PCエンジン、メガドライブに限定するつもりです。

（ロロロロロとメガドライブ）

もし扱ってほしいソフトなどがありましたら、  
感想ページやら作者宛てのメッセージやらでリクエストしてください。

でも、なんでもは扱えないわ。遊んだことのあるゲームだけ。（羽川翼風に）

# 第1話 スーパーマリオブラザーズ

カイコ「最初はやつぱりコレ。スーパーマリオよー!」

チヨコ「ベタだな！」

三ツベタですね

「カイコ」「ふふつ。でも、めずせにこれをやつておかないといダメでしょう？」

「なるほど……。メジャーデビュを最初にやつておけば、マイナーなゲームを取り上げても大丈夫という考え方ですね」

チヨ」「マイナー……といふと、『ホッターマンの地底探検』とか  
か!?

カイコ「ちょ……！ それはちょっと、マイナーすぎ……」

「ヨコハマだつたら、『バードウイーク』とか！」

カイコーそ……それもかなりマイナーやなんじやないかしら？」

カイコ」と……とにかく！ 今回はスーパー・マリオなんだから！

「はいはい。それじゃ、始めますかね？」

チョコ「カセットを差し込んで……電源オン！」

」のオモチャっぽさがこじよな、ファ//コンむー。」

カイコ「ふふつ、そうね。……ほひ、タイトル画面よ～。わわと  
スタートしなきこな」

チョコ「急かすなよ！」

ミム「頑張つてください、チョコ姉様！」

チョコ「フフン、オレの腕前をとくと見よ。おつ、敵だ！」

カイコ「クリボーね

ミム「ジャンプして潰すんです、チョコ姉様！」

チョコ「それくらい知ってるゼー ジャーンプー ……おやっ。」

(SE) てれってれってて

チョコ「うおつ、いきなり死んだ！」

カイコ「ありがちね～

ミ」「カイ」「姉、ダサいです」

「ハハハ、ジャングルが弱すぎたってのもあるた  
ゞ

着地で避けようとしたのに、滑った感じだつたぞ！？」「

カイコ「ふふつ、少し滑る感じのが、このゲームの特徴もあるのよね~」

「『慣性』の法則ってやつか……。さすが、『完成』度の高いゲームは違うぜー！」

「ハ、タジヤレも漏ってますな、チハ姉様」

カイコ「氣を取り直して、クリボーをやつつけちゃって〜！」

「あいよー、今度こそつ！ えいつ！」

(SE)ペひよ!

チヨコ「よし、やつた！……つて、カイコ姉、どうした？」

「カイ」「姉様、なにを身悶えてらつしゃるのですか？」

カイコ「この『ぺひよ』って音……！ 最高だわ！ はう~ん！

はあはあ……。早く、もう一度……」

チヨコ「…………とつても変態な姉を持つて、オレは恥ずかしいぜ……」

ミロ「大丈夫です。チヨコ姉様も、負けず劣らず変」

ゲシツー（無言でチヨップ）

ミロ「…………やめてください、痛いじゃですか。

それに、コントローラーを持ったまま暴れると、バグって止まりますよ?」

カイコ「ファミコンひて、衝撃とかにかなり弱いものね~」

チヨコ「フン! オレだって静かにゲームしたいわ。  
ま、先に進むわ。『?』のブロックだな。確か、これを下  
から叩けば……」

ミロ「キノコが出てきましたよ、チヨコ姉様!」

チヨコ「わかつてゐよ。これを取りて……よし、巨大化!」

カイコ「でも、どうしてキノコで巨大化するのかしら。  
すごく怪しいキノコだわ。副作用とか怖いわね~」

ミロ「それに、どうして着ている服まで大きくなるのでしょうか?」

チヨコ「服が脱げたら一発禁になるだろ!」

カイコ「……その理論だと、『魔界村』は18禁つてこと……」

チョコ「揚げ足を取るな！……おつ、この土管って確か……。よし、入れた！」

〃「土管に入るんですか……」

カイコ「鈴木義司先生ね～」

チョコ「いつたいどこから、そういう知識を……。カイコ姉、年齢査証してないか？」

ドガツ！（無言で蹴り）

チョコ「痛てててて……。オレが悪かった！ 許してくれー！」

〃「…………」まちんふんかんふんです

チョコ「2-1は地下ステージだな！」

カイコ「暗くて怖いわよあ～？」

チョコ「フフン、オレにかかるば楽勝だぜ！ フラワーゲット！」

「ファイアーボールで蹴散らすゼ！ 爽快爽快！」

〃「『ビリ』して火の玉を撃てるのでしょうか？」

カイコ「……さつとあの花、激辛なのよ～」

チヨコ「食べたってことかよー。」

〃「確かに食べられる花っていつのもありますか……」

チヨコ「マコホはビリちかつていつと、花に食べられる狂うだと思  
うぞ」

〃「パックンフラーですね。あれもビリして、土管から生えて  
くるのでしょうか？」

カイコ「細かいことを考えてたらキリがないわ～」

チヨコ「やうだゼ！ 純粋に楽しめばいいのさー。おっしゃ、大ジ  
ヤーンプー！ うおつー！？」

〃「あの……天井の上に乗つかつてしましましたよ……？」

チヨコ「やうだな……ビリじよつ……。下に戻れないかな……？」

カイコ「ふふつ。そのまま進んじゃいなさいな。そうすれば……」

チヨコ「お……お～、なんか、土管があつたー。」

〃「土管の上に2、3、4つて数字が書いてあります。」

それぞれのステージへのワープですね

「ヨコ」「とすると……。よしつ、3の十箇へGOー。」

「ヨコ」「なぜ3なんですか……？」

「ヨコ」「フツフツフ、まあ見てるつてーー。3-1スタートーー。そしてここにで……」

「ヨコ」「あー、カメさんが……段差でマリオに踏み潰され続けてますよー?」

「ヨコ」「これが必殺、100JPだー。」

「カイコ」「説明しよづ~!」

「100JPとは、文字どおりマリオを100人以上に増やす技のことだ~!」

「ヨコ」「そのまんまだなー!」

「マリオって連續で敵を踏み潰すと得點がどんどん高くなつてこつて、最終的には100Pになるんだ。」

「そのあともずっと踏み続けられれば、永遠に100Pし続けられるつて寸法さー!」

「ヨコ」「すごいですねー。ですが、マリオが100人……。どうにう仕組みに」

「カイコ」「細かいことは言つこなしだつて言つたでしょー?」

ミリ「うわあ。なんか、雰囲気違いますね、こい」

チョコ「城の中だからなー！」

カイコ「ふふつ。あつ、そのぐるぐる回転してるファイアーバー、  
氣をつけてね」

チョコ「命令承知！……あつー！」

ミリ「あらり……。ぶつかってしましたね。チビマリオに逆戻  
りです」

チョコ「くそおーー！」

カイコ「でも、ミスにはならないから、頑張つて進みましょー！」

チョコ「もちろんだぜー！」

そして

チョコ「うおつー！ 炎が飛んできてるやー！ むつ、ボス発見ー！」

カイコ「あれがかの有名な大魔王クッパよーー！」

カイコ「ふふつ、ラスボスはフルゴギョ～」

リリ「ええつー？」

チヨコ「嘘教えんなよー。」

リリ「なんだ……残念です」

チヨコ「残念なのがよー。」

カイコ「ふふつ。まあ、今はクッパを倒しましょー。」

チヨコ「しかしこれ、どうすりやいいんだ。  
踏んづけても、いつもがやられちまう。」

カイコ「あら、よくわかつてゐるじゃないの。

（）褒美にヒントをあげるわねー！ 右端のオノがヒントよ  
ーー。」

リリ「ヒントがいるじゃなこですね」

チヨコ「なるほどな。よつしゃ、ジャーンプー。」

カイコ・リリ「おお～～～。」

（クッパ、炎の海に落ちてこぐ）

「『ボスなの』、あつけないですね」

「ま、そんなもんさ！ オレの手にかかるば、ちゅちゅいの  
ちょい、つてな！」

(その後も順調に進めていくチョコ)

「おっ！ 海の上のステージだな！」

「イカがいますね」

「名前はゲッソーヨ」

「すじこネーミングですね……。でも、どうしてイカが空を飛  
んでいるのでしょうか？」

「もう、向度細かい」とは気にしちゃダメって言わせるのよ  
う。

「……そうだわ、今日のおやつはスルメにしましちゃ。  
マヨネーズつけて食べましょうねえ~！」

「オッサンぽいな。やっぱカイコ姉、年齢じゃかしてないか

？」

カイコ「あら、 チョコ。 いらないの～？」

チョコ「…………いるに決まってるだろー。 大好物だしー。」

ミコ「チョコ姉様、 人のことは言えないじゃないですか……」

(そんなこんなで、 ついに最終面)

チョコ「はあ、 はあ……。 ようやくループを抜けたぜ……」

カイコ「よく頑張ったわね。」

自力で抜けられるとは思つてなかつたわ～。 チョコの頭で  
……」

チョコ「カイコ姉、 ケンカ売つてんのか！？」

カイコ「ふふつ、 「冗談よ～」

ミコ「残るはラスボスだけですね！」

（気合を入れてやつつけちゃってください、 チョコ姉様！）

チョコ「ねつよー。」

（そしてラスボス登場！ しかし……）

〃「あの……」れ……」

チヨコ「つむ。ラズボスの大魔王クッパだ！」

〃「同じじゃないですか……」

カイコ「だけど、ハンマーも投げてくるし、結構大変よ？」

チヨコ「フツ、このオレをなめてもうちや困るぞー。えいやつー。」

カイコ・〃「おお~~~~~！」

カイコ「一発で足の下をくぐり抜けるなんて……すじいわー！」

チヨコ「フフン、だてにアクション好きを豪語してゐわけじゃないつうことぜー！」

で、ヒンティング

チヨコ「ペーチ姫！ 助けに来たぜー！」

カイコ・〃「おめでとつ（『れこま』）～」

(SE) パチパチパチ

チョコ「でも、解せんな……」

カイコ「あら、どうして〜？」

チョコ「だつてさ、カツコいい王子様ならいけど、こんなヒゲオヤジに助けられるつても、ちょっと微妙だろ?」

ミロ「あ……まあ……。

ですが、助けてくれたのですから、ピーチ姫だつて素直に感謝するのでは?」

チョコ「でもよ、こいつの場合、助けてくれた人と結婚するのがスジつもんだろ?」

ピーチ姫がかわいそうだぜ!」

ミロ「確かに……そうですね……」

カイコ「そんなんふうに言われるマリオのほうが、かわいそつな気がするわ……」

ミロ「なんだかマリオが、無理矢理ピーチ姫に結婚を迫るひどい男に見えてきました」

カイコ「いや……これ以上マリオの印象を悪くしないつちこ、終わりにしまじょひー」

スルメ、持つてくるわね～！」

チヨコ「待つてました！　おやつターイム！」

ミロ「わーい！　ありがとうございます、カイコ姉様！」

（こうして3人は、楽しくお喋りしながらスルメを美味しいただくのだった）

ミロ「このゲッソー、美味しいですね～！」

チヨコ「ゲッソー言つな～！」

カイコ「ふふつ。それと、プルコギもあるわよ～！」

ミロ「ラスボス来ましたね～！」

チヨコ「違つつての～！」

.....。

娘たち、3人とも、少々変わっている気がするな.....。  
いつたい誰に似たんだか.....。

……俺しかいないか。妻は超真面目人間だったからな……。

まあ、ともかく。

今どきこんなレトロゲームをやらなくともと思わなくもないが、楽しく遊んでくれているようで安心した。  
これからもずっと、姉妹3人仲よくしながら成長していくのをうれしいんだが。

さて……次はいつたい、なんのゲームで遊ぶつもりなのか。  
俺にとつても、楽しみになりそうだ。

### 【ゲーム解説】

#### 「スーパーマリオブラザーズ」

対応ハード：ファミコン 発売元：任天堂 発売日：1985年9月13日

言わずと知れた、世界一卖れたゲーム。全世界で4000万本以上の売り上げを誇る。  
その後もずっと続いているシリーズ。

あまりにも有効なため、とくに解説する必要もないと思つので、これくらいで……。

## 第1話 スーパーマリオブラザーズ（後書き）

こんな感じで書いていく予定です。

こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、それに、こんなネタで絵や画面写真もなくて楽しめるのか、よくわかりませんが……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7085y/>

RGS～レトロゲームシスターズ～

2011年11月21日11時41分発行